

木村博先生のご退職によせて

人間科学科教授 服 部 正

木村博先生は、2021年3月末をもって文学部教授を退職されます。定年より2年早いご勇退となります。先生は、1979年3月に中央大学文学部を卒業されました。1981年4月に法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程に入学され、1983年3月に修士課程を修了、同年4月に博士課程に進学し、1987年3月に同課程を単位取得退学されました。その後、母校の法政大学をはじめ、関東の多くの大学で非常勤講師を務められた後、2001年4月に長崎総合科学大学人間環境学部及び同大学院工学研究科に助教授として着任され、2008年4月には教授に昇進されました。甲南大学には、2014年9月に教授として着任され、文学部人間科学科の専門科目の他、基礎共通科目においても哲学や環境教育学の講義を担当され、大学院人文科学研究科でも研究指導に尽力されました。

木村先生の研究分野は多岐にわたりますが、そのなかでもフィヒテを中心とするドイツ哲学研究は、先生の思想の中核をなすものです。特筆すべきは、先生がフィヒテ哲学の研究史的記述よりも、認識論哲学の根本問題とも言える言語の根源に着目し、そこから言語と視覚像、および言語の社会性といった問題へと関心を展開し、その複雑な連関を長期にわたって追い求めてこられたことです。言語に注目してフィヒテの主観-客観の意味を読み解いた先生の論考は日本フィヒテ協会でも高く評価され、1998年には日本フィヒテ協会第4回研究奨励賞を受賞しておられます。

木村先生の比較思想研究において中心となるのは、大正期から昭和前期に自らの農業実践にもとづいて思索生活を送った哲学者である江渡狄嶺の思想を精密な議論によって読み解くことです。江渡狄嶺や安藤昌益らの「農」における実践的思想に関する先生の研究は、抽象的な理論にとどまるものではなく、環境との実践的関係を築く「農耕」に関する思索へと広がりを持つものでした。そのことは、甲南大学着任後の先生がゼミや基礎共通教育での農業体験の実践に積極的に取り組んでこられたことにもよく表れています。

木村先生は環境学、環境教育学にも力を入れて研究

を続けてこられました。代表的なものとして、ハンス・ヨナスが提示した環境に対する未来責任という倫理観を検証しつつ、先生の前任地である長崎における被爆遺構の保存の問題を考察するものを挙げるができます。都市環境の保全に関する研究を通じて、先生は被爆遺構という場の問題を人間の主体的判断との関係で思想的に読み解きながら、その思想をより広範な平和意識の研究と環境教育へと展開していかれました。

このような多岐にわたる木村先生の思想的基盤と実践的姿勢は、文学部人間科学科での専門教育の他、兼任研究員を務められた人間科学研究所での研究と社会貢献活動、全学的な環境教育にとどまらず、甲南小中学校とも連携した環境教育の実践などで発揮されました。さらに先生は、博物館学芸員養成課程の環境コースのカリキュラムの充実に積極的に取り組まれ、その成果は同コースの理工学部との共同運営へと発展しました。

しかし、このような多方面での教学活動へのご貢献のなか、木村先生は2015年9月に病を得られ、1年間のご休職を余儀なくされました。ご復職後も、後遺症と闘いながらの教育、研究活動のご継続となり、ご自身もどかしい思いをされていたようです。それでも、真摯に教育活動に取り組まれ、懸命に教鞭を執られるそのお姿から、学生が通常の講義では得られないほど多くのことを学び取ったことは間違いありません。願わくは、教職員で業務を分け合いながら、木村先生には定年までお勤めいただきたかったと思わずにはいられません。懸命にリハビリを続けながらの木村先生の教育活動を、私たちが支え切れなかったことは悔やんでも悔やみきれません。木村先生が定年まで教鞭を執り続けることが叶わなかったのは、私たち教職員一同の責任でもあります。いまはただ、木村先生が甲南大学で果たしてくださったご功績に感謝し、どうかゆっくりとご養生いただき、ご自身の歩調で研究活動をお続けいただくようお願い申し上げます。木村先生、ありがとうございました。